
 短 報 Short Reports

三重県における新しいカワウのコロニー

樋口行雄¹・藤岡正博²

カワウ *Phalacrocorax carbo* の繁殖地は我国においては極めて少なく、1981年現在青森県下北半島の市柳沼と山辺沢沼、東京都台東区の不忍池、愛知県知多半島の鷯の山、大分県南海部郡の沖黒島のわずか5か所が知られているにすぎない(福田 1981, 福田他 1982)。1982年に、筆者らは三重県において新しいコロニーを確認したので報告したい。

繁殖地は、志摩半島南部の五ヶ所湾に面する三重県度会郡南勢町迫間浦の通称大瀬と呼ばれる小半島(海拔80m)である。半島の先端部のなだらかな南斜面の一部がコロニーとなっている。かつていわゆる段々畑として利用されていたところで、その後放棄され、耕作時に植えられたとみられるクロマツ、シイ、タブ、ウバメガシ、サンゴジュ、ビワ、メダケなどが樹高8~15mの林に成長しており、林床にはコシダ、ウラジロなどのシダ類が混生している。

7月1日の調査では、コロニーは50m×50m程の範囲であり、巣はすべて6m以上の樹上にあつて少なくとも60巣を確認した。大部分は巣立ち後であつて巣立ち幼鳥がみられたが、5巣では雛が確認された。すなわち、1巣は巣立ち近い雛2羽、2巣では11~20日令と思われるかなり小さい雛各2羽が観察され、2巣では初期雛と思われる声が聞かれた(うち1巣は親鳥による抱雛を観察)。このような状況から、調査した時期は、群れとしては繁殖後期にあたつてたとみられる。営巣樹種は、シイ、タブ、シラカシ、アカメガシワ、クロマツであつて、シイ(25巣41.7%)、タブ(12巣20.0%)での営巣が多い。巣材にはふつつ枯枝を使用していたが、一部で漁網用ロープ、荷造り用ポリエチレンテープも使用していた。生息個体数については全群をみるることができなかったので明らかではないが、飛翔時の印象から、巣立ち幼鳥も含め200~300羽と推定した。

この地域では少なく見積つても500羽以上とみられるサギ類、すなわちアオサギ *Ardea cinerea*、コサギ *Egretta garzetta*、ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* が繁殖しており、チュ



Fig. 1. Nests in the colony at Hasamaura (1st July 1982).



Fig. 2. A nestling on a nest at Hasamaura (1st July 1982).

ウサギ *Egretta intermedia*, アオサギ *Bubulcus ibis* も観察された。そのコロニーはおよそ $200\text{ m} \times 200\text{ m}$ の範囲である。カワウはサギ類のコロニーの上部端に接するように営巣しているが、営巣範囲はほとんど重複していなかった。

このコロニーの形成過程について詳しいことは明らかではないが、1980年6月13日にサギ類のコロニーの分布調査を行っていた筆者の一人藤岡が、約1km離れた対岸から同所で100羽位の本種といくつかの巣を観察しており、1980年から繁殖していたことは確かである。三重県においてカワウのコロニーは、1977年から1979年にかけて当地より約3.5km北東の五ヶ所湾に面する南勢町飯満にあった(樋口他 1980, 橋本 1981)が、1981年にはすでに繁殖していないことを福田道雄(上野動物園)と樋口が確認しており、植生の状況から1980年以前に放棄されたと推察された。迫間浦と飯満は距離が近く、飯満において繁殖している期間には当地での繁殖は確認されておらず、繁殖地としての長期利用によっておこる樹木や下層植生の枯損もあまり進行していないことから、迫間浦のコロニーは飯満において繁殖していた群れが移動して形成されたと考えられる。しかし、飯満では35巣、幼鳥を含めて約80羽(橋本 1981)が記録されているにすぎない。また1969年から1971年にかけて度会郡大宮町の宮川中流にあったコロニーでも、生息个体数は約50羽と推定されている(倉田 1970)。迫間浦のコロニーにおける巣数や飛翔个体数は、この2か所のコロニー、特に飯満よりかなり増加している。本コロニーには飯満からの移動群のみではなく、他の地域、例えば現存するコロニーで当地に最も近い(約55km) 我国最大の愛知県知多半島の鶴の山からの分散個体加わっている可能性もあるように思われる。

本コロニーの規模は、愛知県の鶴の山の約10,000羽、東京都台東区の不忍池の約1,000羽よりは著しく少ないが、青森県下北半島の市柳沼と山辺沢沼、大分県南海部郡の沖黒島の各約100羽(樋口他 1980, 福田 1981)よりは多いように思われる。しかも、鶴の山を除く4か所ではここ数年繁殖していながら群れがほとんど増加しておらず、鶴の山でも確実に増加しているとは断定できない状態にある(福田 1981, 福田他 1982) 現在、本コロニーにおいて最近わずかながらも個体数が増加していることは注目すべきであろう。

当地における繁殖生態については今後詳しく調べる必要があるが、7月には群れとしては繁殖最盛期をすぎたことから、繁殖期は鶴の山(福田他 1982)と以ているように思われる。なお、採食地に関しては詳しく調べていないが、1981年、1982年とも繁殖期に相当する4~7月に北西約2kmの伊勢路川河口、南西約4kmの南勢町相賀浦、飯満などの海上で採食しているのを観察しており、半径4km内外の五ヶ所湾一帯に及んでいると考えられる。

本コロニーは数少ないカワウの繁殖地として重要であり、アオサギを始めとするサギ類の集団繁殖地とともに、今後とも繁殖が継続されるよう、立入りの規制など早急な保護対策が望まれる。

この小文を記すにあたって、いろいろと有益なご教示をいただいた東京都恩賜上野動物園飼育課の福田道雄氏に感謝したい。

文 献

- 福田道雄. 1981. カワウのコロニーの拡大と群れの分散. どうぶつと動物園, 33(1): 368~373.
 福田道雄・黒鳥英俊・小森 厚. 1982. カワウの繁殖状況—コロニーの比較調査—. WWF J 昭和56年度保護事業助成金調査研究報告.
 橋本太郎. 1981. 三重県内カワウの新繁殖地について. 三重生物, 29/30: 9-11.
 樋口行雄・西川和夫・畠山 高・阿部誠一・飯田律子・尾崎吉彦・小島ほづみ・小林 洋・阪本利継

- ・佐々木秀信・佐野裕彦・花輪伸一・塚本洋三. 1980. 日本におけるカワウの現状. 昭和54年度環境庁委託調査. 特定鳥類等調査, 47~86. 日本野鳥の会.
- 介田 篤. 1970. 三重県におけるカワウ・ウミネコのコロニーについて. CRINUM, 12:30~31. 三重大学教育学部生物学教室.

1982年9月8日受理

- 〒150 三重県四日市市ときわ4-3-24
- 〒558 大阪市住吉区杉本 大阪市立大学理学部生物学教室

A New Colony of the Common Cormorant (Phalacrocorax carbo)
in Mie Prefecture

Yukio Higuchi¹ and Masahiro Fujioka²

A new colony of the Common Cormorant (Phalacrocorax carbo) was found in Hasamaura, Nansei-cho, Watari-gun, Mie Prefecture in 1982. The Colony was situated on a small peninsula covered with evergreen forest adjoining mixed-heronry (Ardea cinerea, Egretta garzetta, Nycticorax nycticorax). On July 1, 1982, at least 60 nests were confirmed, five of which contained nestlings. The total number of birds in the colony, including fledglings, was estimated to be 200 to 300. It is inferred that this colony moved to this location from Hamma, Nansei-cho (3.5km northeast of Hasamaura) where there was a colony of about 80 birds between 1977 and 1979.

- 4-3-23 Tokiwa, Yokkaichi-shi 510
- Department of Biology, Faculty of Science, Osaka City University, Sugimoto, Sumiyoshi-ku, Osaka 558

コシジロイソヒヨの日本初記録について

川 田 隆¹

1982年5月29日, 静岡県周知郡春野町杉川林道9 Km地点において, 1羽のコシジロイソヒヨ Monticola saxatilis の雄成鳥を観察し撮影した. 本種はヨーロッパ中央部から中国東北部に分布するイソヒヨドリ種の1種で, 本邦初記録と思われる. そこで発見時の状況と観察結果を報告する.

観察状況: 発見場所は, 赤石山脈最南部の蕎麦粒山(1627 m)の裾をまくように造られた林道で, 標高は800 m, ブナやツガなどの天然林とスギ, ヒノキ造林地が山を被い, 岩場やガレ場が点在している. 観察個体は, 体型がイソヒヨドリ M. solitarius よりふたまわりほど小さく, 尾羽が短かく尻すばみの感があった. 体色はイソヒヨドリ雄成鳥に類似するが, 背中から腰にかけて大きな白斑があり, 腹部のオレンジ色はイソヒヨドリよりやや淡いが上方まで及んでおり, 白色小斑を多数認めた. 尾羽は腹部と同色のオレンジ色が主体で中央部だけに黒褐色を認めた. 頭部から首までの青